

平成28年度第4回岡山市総合教育会議

日時：平成28年11月30日（水）

場所：市庁舎 第3会議室

○司会 定刻となりましたので、ただいまから平成28年度第4回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は塩田委員がご欠席ですが、運営要綱の定めにより会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが、入室を許可してよろしいでしょうか。

〔「お願いします」と呼ぶ声あり。〕

○司会 傍聴者の入室を許可します。

〔傍聴者入室〕

○司会 それでは、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は、招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしく願います。

○市長 はい。それでは、次第に沿って議事を進めます。

今日の新聞に国際の学力調査の結果が出てましたですね。理数離れというのが随分言われてたのが、特に理科が国際水準、大分よくなってきているというような話がありました。前回、学力の話も随分議論させていただいたんですけども、今日は特に問題行動でありますけれども、全体の動きを捉えながら、きちっと対応していかなければならないように思っているところであります。

大綱の策定でございますけれども、これももう今年度中を目指すということで来ておりましたので、大分詰めて議論していかなければならないということなんだろうというように思います。

本日は、前回、学力の話随分やらせていただきましたので、もう一つの重点項目である「暴力行為、いじめ、不登校の防止及び解決」について意見交換を行いたいと思います。

それでは、資料1について説明をお願いします。

○菅野教育長 教育長でございます。

それでは、資料1についての説明を申し上げます。

この資料をご覧ください。

この資料は、岡山市の子どもたちの暴力行為、いじめ、不登校等、問題行動等というふうにかえまされども、問題行動等の防止及び解決につきて、現状と課題、その方向性等を示したものでございます。

問題行動等につきて、日々の教育活動の充実、家庭・地域との協働により成果を上げてきてるところではありますけれども、この資料では主に課題となるところ、問題点となるところを中心に取上げて、今後の方向性につけてまいりたいというふうにかえております。

それでは、左側の現状と課題の欄ををご覧ください。

まず、最初のところにありますが、現状として、中学校の暴力行為は減少してきてるが、生徒1,000人当たりの発生件数は、依然、全国の約2倍と高くなっております。いじめの解消率は高い水準を維持しているんですけども、長期化するケースもあります。また、小学校児童の不登校の出現率、これは全国と比べ高い状態が続いている。

こうした現状に至った背景として3点洗い出しました。この赤い矢印の下ですが、1つ目は問題行動等の原因や背景の分析、児童・生徒一人一人の実態把握が不十分だったこと、2つ目は問題行動等への対応に関する体制が不十分な学校では問題を担当教員が抱え込むという傾向にあること、3つ目は専門家の活用や関係機関との協働につきて学校間で取組みに差があったこと、この3つでございます。

資料の2枚目をご覧ください。

この資料には、今申し上げました3点の背景それぞれにつきて、具体的な例を挙げて記述しております。

左側は、参考となる学校の取組み例、言いかえれば望ましい対応の例でございます。右側は、課題がある学校の状況や改善に向かいにくい学校に見られる傾向が書いてあります。ただ、左側が参考となると書いてありますが、じゃあ問題行動等の数が少ないというわけではございません。逆に、右が問題行動が多いということではございません。問題行動にはさまざまな原因があり、いろんな要因から、なかなかいい対応をしているから少なく、よくないから数が多いということではないということもご理解ください。

まず、原因や背景の分析、児童・生徒の実態把握につきて、左側の望ましい対応例としましては、調査等の結果をもとに背景や傾向を分析して指導に生かしたり、教職員がふだんから児童・生徒や保護者にしっかりかかわったり、児童・生徒の状況につきて

まして全職員で情報共有したりすることなどが挙げられます。一方、改善に向かいにくい学校に見られる傾向としましては、調査等の結果について分析、活用ができていない、児童・生徒や保護者とのかかわりが不十分、校内の情報共有が不足しているなどの状況が見られます。

2点目の問題行動等への対応に関する校内体制につきまして、望ましい対応例としましては、問題行動等が発生した場合に迅速に判断し、対応したり、学校の方針などを児童・生徒、保護者、地域の方に周知したり、子どもが取り組みやすいアイデアを持って未然防止に取り組んだりすることが挙げられます。一方、改善に向かいにくい学校に見られる傾向としましては、情報伝達の方法や対応判断の手順が明確になっていない、担当者が抱え込んでしまう、学級や学年間で対応に差がある、保護者や地域の方と学校との協働が余り進んでいないなどの状況が見られるようです。

3点目、専門家の活用、関係機関との連携についてですが、望ましい対応例としましては、ふだんから専門家、関係諸機関と情報を共有したり、相談機関や医療機関の最新情報を把握し、ケースに応じてつないだり、教育委員会の事業等を活用したりすることが挙げられます。一方、改善に向かいにくい学校に見られる傾向としましては、専門家や関係機関との協働の仕方が周知できていない、学校だけで判断・対応したり、先送りにしてしまったりする、強い要望や抗議に対して言われたとおりに対応してしまうなどの状況が見られます。

それでは、再び資料の1枚目にお戻りください。

今申し上げました現状とその背景から、問題行動を減少させるためには、未然防止の取り組みを継続するとともに、それぞれの課題に特化した取り組みを全ての学校で行う必要があります。教育委員会のリーダーシップのもと、右上にございますように取り組みを推進していかなければならないと考えております。

方向性のところにございますが、暴力行為につきましては、重大な事案や、事案が繰り返し発生した場合は、警察、学校、教育委員会によるケース会議を開いて対応を検討し、学校の状況に応じた支援チームにより、再発を防止してまいります。

いじめにつきましては、早期発見に努めるとともに、学校がいじめを認知した場合、必ずいじめ専門相談員やスクールカウンセラー等の外部専門家を交えて対応を検討し、学校の対応力が向上し、一定の解決が迅速に図られるというふうになるように努めてまいります。

不登校につきましては、3日連続欠席、また連絡なしの欠席や遅刻・早退が増えるなどの兆候に対しまして、不登校児童生徒支援員等を活用して素早く対応し、市全体で新たな不登校児童・生徒を生まない取り組み、これを徹底してまいりたいと考えております。

また、学校の体制整備、わかる授業づくり、支え合う集団づくり、非行防止教室の実施といった問題行動等の未然防止につながる取り組みを今後も重視してまいりたいと考えております。小学校高学年や中学校で問題行動を起こす子どもがよく話をするごとに、もう小学校の低学年から勉強がわからなくなっているんだというようなことも多々あります。小学校低学年のときに、もうわからないことをわからないままにするのではなくて、しっかり理解させて上の学年に上げていくといった学力の取り組みも問題行動に対して大切になってくると考えております。

以上のような取り組みの改善を通しまして、暴力行為につきましては、平成32年度までに中学校の生徒1,000人当たりの発生件数を平成27年度の半数以下となるようにする。また、高いいじめの解消率を維持し、小学校・中学校ともに国の調査における解消率が100%となることを目指します。さらに、平成32年度までに小学校の不登校の出現率が平成27年度の全国の出現率を下回るようにいたします。こうした目標を持って取り組んでまいりたいというふうに考えております。

以上でございます。

○市長 はい、ありがとうございました。

それでは、ただいまの説明につきまして、出席されている皆様方からのご意見をいただきたいと思っております。

中学校長会の藤井会長、小学校長会の薄会長、またベネッセコーポレーションの西島さん、梅田さんも議論にご参加をいただきたいと思っております。どなたからでも結構でございます。ご意見をお願いいたします。

奥津さんから行きますか。

○奥津委員 はい。この問題というのは、現場で暴力行為にしても、不登校にしても、いじめにしても、学校が原因になる場合とそうでない場合とあると思うんですけども、まず把握することが一番大事だと思うんですね。そのためには日頃から生徒・児童に接してる教員がしっかり把握するという端緒というか、そこからスタートになると思うんですけども、そこをしっかりとするという意味では恐らく教員の質と量の問題があるんか

なと思います。

量に関しては、もうこれはとりわけそういったことに当てられるかという、学校と生徒との数というよりは時間ですかね。時間とかその密度とかという形で、より生徒・児童と接する機会なり期間なりを増やして、よく観察する機会を増やすという問題と、あとどれだけしっかり情報収集ができるのかと。指導していく中で、何か問題があるんじゃないかというようなことをちょっとしたことからしっかり把握していくという、そういった能力というか、質の問題の点をしっかりやっていくことが重要なんだろうと思います。そういう意味では、そういったことに向けての研修とかスキルアップを図ることとか、そういうことが端緒の面では非常に重要になってくるのかなというふうには思っているところです。

○市長 はい、ありがとうございました。

では、石井さん、お願いします。

○石井委員 はい。失礼いたします。前回の学力のことに続いて、この暴力行為、いじめ、不登校の問題行動等ということは、岡山の市民の皆様、それから親御様、それからこれから子どもを産もうとされてる方にとって一番気になっているトピックではないかなというふうに思っております。前回の学力の問題に続いて、この問題行動等というのに強くスポットライトを当てて取り組むということは、多くの市民の方の切望していることに合致してるのではないかなというふうに考えております。

この中で、暴力行為の1,000人当たりの発生件数等というのは、各自治体によってその出し方というか、そのバーをどういうふうに設けているかということによって数字が結構ばらつきがかなり大きいということも承知しておりますけれども、この不登校の出現率等というのは比較的バーというのが一致してるのではないかなというふうに思われますし、これは解消していくということが求められているのではないかなというふうに思っています。

あと、この2枚目でご説明いただいた課題がある学校の状況等で、これができてない、これができてないという部分の要因というのは、実際に何が要因なのかなという部分をつかんで、それができるように教育委員会のサポートというか、そういうものが求められているのではないかなというふうに感じております。

すみません。あともう一点だけ。このいじめの解消率の維持で、100%になることを目指すというのは、もちろん大事な事かなというふうに思うんですけども、この数字

だけがひとり歩きして、形式的な数字にならないように注意を払わないといけないのかなというふうに感じております。

○市長 はい、ありがとうございました。今、石井委員から言われた、この課題の要因と
いうのか、そのあたりは教育委員会として、どう考えられているのか。これについてコ
メントをしていただけますでしょうか。

○事務局(服部教育支援担当課長) 教育支援担当課長でございます。

例えば、子どもと向き合う時間が足りないということの実態把握のところですけども、
教員が多忙になっているという状況等もこの要因、背景の中にあるのではないかと
思っています。それから、保護者との連絡であるとか、そういったところにかなり時間がかか
ったりするというような現状もございます。それから関係機関と協働していこうというところ
にも当然人と時間というのが必要になってまいりますので、やはり人数が限られている中
での学校の動きの中で、かなりの制約を受けてしまっている。そういうことが、こうい
う部分につながってしまっているところがあるんじゃないかなというふうには考えてい
ます。

以上です。

○市長 ただ、学校に相当の差があるというのが2枚目の分析で出てますよね。今の服部
さんの話としては、全体的な感じではわかるんですけども、学校によって、こういう
サインが出てるということに対して、どういう要因を持っておられるか。

○事務局(服部教育支援担当課長) それぞれ学校によつての課題というのは異なります。

例えば、市内の中心部の大きい学校、それから周辺部の比較的小さい学校、それぞれ課
題が異なる中で、教員の人事異動等もございます。子どものほうの変化ということもご
ざいます。そういう中で、うまくかみ合わなかったときに、学校によって右側にあるよ
うな対応になってしまうといったようなことが起きる可能性があります。

それから、学校の中では、こういうことに対しての積み上げというのをやっていって
るわけですけども、今の教員体制の中で50代の先生が多い学校、それから若い先生が
大分増えてきた学校等の年齢構成等のこともございまして、うまく積み上げの部分があ
りません。そういったことから起きています学校間の差というのを感じたことがござい
ます。

○市長 石井委員、どうですか。

○石井委員 私自身は現場をきっちりよく理解できてない部分があるので、今のご説明の

要素というのはあるのかなというふうに思っております。

あと、それぞれの学校での問題、この問題へのフォーカスの仕方とか、そのフォーカスの度合いがもし違っているのであれば、もしそこを、いや、これは大事なものなんですよということで、学力の問題とあわせて、教育委員会含めて、リーダーシップ、サポートを強めていくことで、そこが強化できたらいいなというふうに感じました。

○市長 私も石井委員と全く同様の感じを持ってまして、教育委員会の強いリーダーシップというのは必要じゃないかなというように思います。

じゃあ、藤原委員、お願いできますか。

○藤原委員 今まで学力向上について、たくさん皆さんで論議してきて、そしてここで暴力行為、いじめ、不登校ということで、学校で起きていることの問題の大きなものは、こういうところで全体が見られたかなとっております。やはり学力を向上させるためには、土台は今回扱ってるようなことが解消できないと伸びないと思いますので、根っこのところは一緒だと思いますね。それは未然防止にいろいろ書かれてますけど、ふだんの学校教育が本当にもう全てだと思います。

子どもたちは発達段階が違っていても、やはり集団の中で満足しているかどうかというのが、これら全てに絡んでくるので、やはり未然でない起きてからではとても大変になるし、複雑になるし、解決しにくくなるということは、やはりこの前からの学力向上も含めて、全体的に集団の中での、例えば自尊感情であるとか承認欲求が満たされているかどうかとか、立ち位置であるとか、そういうものが全部どういうふうに絡み合っているかということになると思いますので、今回のシートにそのあたりの全体のことが書かれているので、これからダイナミックにもう少してこ入れができるのかなというのを思いました。しなくてはいけないなど。

それで、先ほどから石井委員さんの話も聞きながら、ここに1つ文言として入れてほしいと思うのが、やはりチーム学校だろうと思います。学校の資源は限られているといたらおかしいけども、皆さん切磋琢磨したり、スキルアップしてるんだけど、でも家庭の状況やら体調やら年齢期とか、いろんなことがやはり関係してくるので、どこの学校も同じというわけではないんですよ。目指すところは同じで努力も同じようにしないといけないんですが、そのときにチームになれるかどうかで効果は随分変わってくると思います。目指すところの参考となる学校の取り組みで、うまく効果を上げてるところ、それぞれは全部やっていってると思います。ただ、それが本当にチームとなって

るかどうか、構成メンバーがかわっても機能するかどうかといたら、やはりチームになれるかどうか。関係機関との連携も含めての、ちょっとその言葉があったらいいなと思いました。

○市長 私も藤原委員と同じように、学力とこの暴力行為というのは、もう完全にニワトリと卵の関係で連動している話じゃないかなと、まずは思っております。それらの頭の整理も一回しとく必要がある。別のものとして余り整理し過ぎるとよくないのかなという気がいたします。あと、今、藤原委員が言われたチーム学校についての考え方、教育委員会からお願いできればと思います。

○事務局(服部教育支援担当課長) 方向性の暴力行為のところに「『支援チーム』により」というチームという言葉は入れておりますが、チーム学校という言葉が文部科学省のほうでも言われていて、学校における、さまざまな職種の者がきちんとチームをつくって対応していくべきだと。例えば、養護教員ですとかスクールカウンセラーですとか、岡山市で言うと不登校のところにあります、不登校児童生徒支援員ですとか、さまざまな職種、ボランティアも含めまして、立場の者が学校に勤めております。そういう者が一体となって対応していくということは、岡山でも目標としては掲げております。

ただ、幅広く考えると、例えば学校医さんですとか学校外のさまざまな立場の方がおられますので、地域の方々も含めまして、どういうチーム学校が望ましいのか、それぞれの学校に応じた、あるいは岡山市に応じたチーム学校のあり方というのを考えてまいりたいというふうに考えています。

○市長 藤井さん、お願いいたします。

○藤井中学校長会長 この問題行動についてですけれども、参考となる学校の取り組みと課題がある学校の状況、教育長さん言われたように課題があるから学校でできていないんだというのではないし、それから参考となる、すばらしい取り組みをしているから問題がないわけではない。やはり参考となる、すばらしい取り組みをしてても、問題が出ている学校もある。岡山市内でも学校の置かれている地域とか、周辺部とか中心部とかありますけれども、そういう状況によって通う生徒たちや保護者の状況が違うので、一概には言えないと思うんです。

ただ、むしろこの参考となる学校の取り組み例というのをきちっとやってるところというのは、やはり生徒や保護者が大変なところの学校が一生懸命やっているのかなと。

周辺部の比較的家庭も落ちついているし、子どもたちも元気に学校に通ってきて不登校も少ないというようなところは、要するに自分たちの目標レベルが低くなるわけですから、それに合わせた教育をしていけば、それで十分なわけで、やはり課題があるからできてないというわけではないと思います。

ただ、今チーム学校という言葉が出たんですけれども、それに関して少し話をすれば、チーム学校のもとにはチーム担任、担任って担任は1人なんですけど、チーム学年団だと思うんです。学年団という一つの集団、要するに生徒たちを直接抱える主任やら担任が力を携えて、そこで能力を発揮する。それに今、服部先生も言われたような支援員や、それから養護教員などの専門知識が入ってサポートする。そうやって学校は回っていくのかなと。だから、その学年団がすばらしい判断や行動力があれば、かなり学校は落ちついてくるのかなと。ただ、それが1、2、3と全部揃うか揃わないかは人事異動によっても違うんですけれども、それでも隣の学年を見て、あそこはこういう取り組みをやっているということ参考をしながら、やはりお互い切磋琢磨して、すばらしい学年団をつくっているし、そういう学年団がすばらしいところは学校も伸びているという気がします。私の経験からですけど、はい。

○市長 学年団というのは、私自身いろいろと教育委員会と議論をしても、なかなか出なかった言葉で、ああ、そうかというような感じもいたしました。学年団に関して、教育委員会ないしは教育長、お考えがあれば。

○菅野教育長 今、藤井校長先生、中学校の校長先生ですので、学年団というのは中学校特有のものかなと。もちろん大規模の小学校では、やはり学年団というのが基準の単位になります。ただ、小学校の場合には単学級とかということもあって、なかなか学年団ということにはならないんですけども、非常に大きな示唆を与えていただいたと思います。ありがとうございました。

○市長 行動もそうなんですけど、全体に関しては藤井さんのおっしゃる意味はわかるんです。それは学校によって、学校の学区というか、学区の中の生活環境というのは多分、多分といいますか、エリアによって大きく変わってくる。したがって、そこでの先生方の行動が、いかなる行動をしようとしても成果が一定のところまでとどまっちゃうとか、そういうこともあるでしょう。そこはあるんですけども、私はそういう横の議論もありますが、もう一つは縦系列の時系列もあるんじゃないかと。この参考となる学校の取り組みというものをやっていけば、例えば5年間を見ていけば随分と変化してきて

るということになっていくんじゃないかと。だから、横だけ見る必要はなくて、縦を見て、その成果というものを考えてあげるということも重要なんじゃないかなというように思ってるんですが、それに対してはどうでしょうか。

○藤井中学校長会長 それは私も同じように思います。参考となる学校の取り組みということで、かなりここへ書いてくださって、まとめてくださってるんですけど、岡山市内は、こう言えば手前みそというか、言い訳になってしまいますが、かなり左側の参考となる学校の取り組み例というのを地域、格差はあるにせよ、かなりやってるのかなと。今定着してきてるのかなと。

ですから、私が教員になった頃に比べれば、随分中学校も落ちついてきた。それは暴力をする子も何人かはいるかもしれませんが、落ちついてきたし、極端な例をいいますと、生徒が教室に入らずに徘徊をする、それについて教員がずっとついて回っている。世間から見れば、何でもっと厳しゅうせんのならというような意見もあったりしますが、その子たちは学校へ来て、先生と話をしながら、家庭の話やいろんな話をして、恐らく訓練を受けている。集団の訓練を受けている。だから、ニートにならずに済む。だから、将来、卒業した後、自分の道が開けていくということがあるんで、この縦軸のこの取り組みは、かなり今周辺和学校から中央の学校から岡山市全体に広がってきているという認識は持っています。

○市長 もう一つ、縦軸について同じ理解をしていくということであるのであれば、岡山市内の地域差というのはもちろんあるんですけども、そういう面で行くと、全国的な地域差で見ると、岡山がそんなに特異的なものではないはずですよ。それに対して、例えばこの暴力行為を見ていくと、全国の数字に比べて倍ぐらいの数字が出てきている。それは石井さんの話があったように、この物の捉え方が違うのであれば、そこはまた変わってくるでしょうけれども、同じようなものを捉えているとすれば、まだまだ取り組みが足りないということに私はなるんじゃないかというように思うんですけども、それに対してどうですか。

○藤井中学校長会長 かなりいろいろ学校では取り組みをしていると思います。ただ、生徒たち一人一人の家庭状況というのは非常に複雑で、すぐにすぐ解決する、もうもつれたひものようになっていて、そのことを学校教育だけですぐ解決するということにはなかなかならないというのが現実に重たくのしかかっていると思います。ですから、むしろ地域協働学校をして、いろんな関係機関やら地域の人が学校の応援団になっ

てやろうというような機運が生まれてきて、それを支えていってくれてるということはあるありがたいことだし、それぞれの専門の知識を学校の中へ注いでもらってるという取り組みは、素晴らしいことじゃないかと思います。

○市長 こういう危機感をチーム学校という、学校の範囲にもなるのかもしれませんがけれども、皆さんで共有しながら一歩でも前に進んでいくということですよ。

○藤井中学校長会長 はい。

○市長 そうということですね。はい、わかりました。

じゃあ、薄会長、お願いいたします。

○薄小学校長会長 小学校としましては、この不登校の出現率を何とか減らしていかななくてはいけないということで、校長会も生徒指導委員会の中で不登校を中心に取り上げて研修をしております。先日も教育支援室の室長にお越しいただきまして、不登校の未然防止、何とかこれができないかということで研修を受けました。もう今若い教員のほうでは、誤った認識なんですけども、長欠は3日というふうに発言する教員がいるくらい、3日連続欠席の児童をとにかく早目、早目な対応をしていくということで取り組んでおります。

ただ、この不登校の非常に難しい問題を抱えておりますのが、心理的、情緒面での不登校に陥る場合、これは学校の教員だけではなかなか非常に難しい。スクールカウンセラーの積極的な活用、また現場に対する教育委員会からの指導、助言をしっかりといただければいいかなと思っております。

この不登校については、将来的にひきこもりになり、未就労という非常に怖い結果に導かれていくのかなという思いもありますので、とにかく学校には行くんだと、そういう楽しいこともいっぱいあって行くんだという意識を入学時からしっかり植えつけていきたいと思っておりますし、やはりそのあたりは地域協働学校の保・幼・こども園・小・中の連携も大きいことになるのかなと思っております。

○市長 薄さん、小学校の校長会として、この問題行動の中で最もターゲットとして考えていかなければならないのは不登校だという、そういう認識と考えていいんですか。

○薄小学校長会長 現在は、はい。

○市長 そうということですか。これに対しては教育委員会のほうは何かありますか。

○事務局(服部教育支援担当課長) 不登校、岡山市の傾向を見ると、割と早い段階から不登校に陥っている子どもの割合が高かったりですとか、長期化というような傾向も見て

とれます。そういったことから、新たな不登校を生まない、特に小学校段階、低学年、中学年段階において、不登校の未然防止に最大限力を注いでいかなければいけないのが共通の認識でございます。

○市長 はい、ありがとうございました。

じゃあ、西島さん、お願いいたします。

○ベネッセ(西島) 2点申し上げたいと思いますが、まずは教育はもともと家庭といいますか、家庭教育が根本であり、特にこの暴力行為、いじめ、不登校という問題は、本当はもう家庭の問題だというふうに思うんですけども、なかなか家庭の啓発、保護者の啓発ですとか家庭で何とかしてくれというふうな動きをしても解決できないというのが現状だと思っています。そんな中で、こういった形で教育委員会のリーダーシップのもとで解決していくんだという表明をされたことに敬意を表したいというふうに思います。その中でも、もうお話出ておりますが、やはり授業とこういったことはもう一体でございますし、子どもたちが自らが学校に来て成長できたという実感が持てるような教育活動をしていく、授業をしていくということが、こういったことの防止につながっていくだろうというふうに思います。

それから2点目ですけども、これ、昨年この会議で、この暴力行為等についてのレポートをさせていただいたときに香川県の例をお示したんですけども、決して教育委員会、学校が一方的、一方的にと言ったら言葉が悪いですが、子どもたちにこういうことをしようというふうな啓発をしていくことだけではなく、子どもたち自身がこういった問題をどう解決していくのかということを考えようという取り組みをしてこられています。そこには教育委員会とそれから警察とが連携をしながら、あとは生徒会、これは中学校の例だったんですが、生徒会が学校を超えて複数の学校の、複数の学校といいますか、県内のいろんな学校の子どもたちが集まって解決していこう、それを学校に持ち帰って自分たちの活動としてやっていこうということで、相当この問題行動が減ったということがございました。

5年も続けるとなかなか減り方が減らなくなってしまっている状況が現状だと思うんですが、それでもこの数年で大分減ってきている状態があります。そのように決して学校や教育委員会だけの動きではなく、子どもたちが主体的にどう解決していくのかということ为先導していただくといいかなというふうに思います。そのことはこの問題の解決だけではなく、子どもたち自身の将来につながる力の育成にもなっていくと思

ますので、是非そこもお考えいただけたらというふうに思います。

○市長 ありがとうございます。少しよくわかんないところがありますが、子どもたちが自主的に、この変化みたいなものをどうやって測っていくのでしょうか。

○ベネッセ(西島) 変化の測り方は国の調査がありますので、それが暴力行為等がどんどん減っていったというのが、この過去の、六、七年前から取り組まれていると思うんですが、この5年ぐらいで減ってきているというのが成果だと思います。

○市長 それはもちろん子どもたちの環境がよくなり、子どもたちが暴力行為をやめていくということにはなっていくというのはわかるんですけど、その何か自主的な行動の変化というのが暴力行為の数が減るということだけでわかるんですか。

○ベネッセ(西島) 自主的なというのはちょっと言い過ぎだったかもしれませんが、もちろん仕掛けるのは教育委員会だったり警察だったりという組織で、子どもたちに働きかけをして子どもたちが動けるようにしていくということだと思います。完全に主体的に子どもたちから出てきたものではないと思いますが、そんな中でも、例えば生徒会委員の人たちを集めて、学校を超えてこういうことをやっていこうよという働きかけを警察や教育委員会でやり、それを学校に持ち帰って、学校の中でこういった暴力行為やいじめをなくしていくというのを先生の発信ではなく、生徒からの発信でみんなを動かしていくということをやっているということでございます。

○市長 何かありますか。

○菅野教育長 今、西島さんがおっしゃってくださったのは、生徒指導には積極的な生徒指導というのと消極的な生徒指導というのがございまして、消極的な生徒指導というのは何か問題行動が起きたから、それに対症療法的に動いていくというのがあって、それは学校の先生が中心になって子どもたちを厳しく叱ったりとか保護者を呼んで注意をしたりということがあるんですけども、さっき言われたのは積極的な生徒指導のほうで、ここにも今日も出していますが、未然防止の取り組みでございます。

子どもたちが中学校であれば生徒会を使って、もちろん生徒会の活動ですから絶対先生の指導は入るんですけども、さも子どもたちが自分たちで考えて自分たちの問題行動の数を減らしていこうというような取り組みを進めていく。そういったことを恐らく香川県では取り組まれたんだと思うんですけども、本市でもそういう取り組みを進めているところがございます。例えば、つい最近新聞で見たのは、自分たちの学区の中にある落書きを中学生が消していったとか、そういった点も恐らくそのうちの一環だと思うん

ですけれども、そういったのをこれからもどんどん進めていきたい。もう教育委員会の事業としても進めていきたいというふうに考えております。

○市長 じゃあ最後、梅田さん。

○ベネッセ(梅田) 今回この問題行動、特に暴力行為にかかわるところでございますけれども、これまで見るからにやんちゃな子たちが起こしているというのがあったかと思えますけれども、近年、成績も特に問題がなく、見かけも普通の子が内面にどんどんストレスをためていって、ある日爆発してしまうといったような問題行動も増えているというふうな形で聞いております。そういった意味では、これまでとはまた違う視点で子どもたちを見るといいでしょうか、きめ細かくコミュニケーションをとっていかなくてはいけないというふうになってきてるのではないかなというふうに思っております。

また、ある研究において、こういった問題行動を起こす子どもというのは、先ほど来、出ておりますけど、家庭の中で十分なコミュニケーションがとれてないですとか、そういった家庭において自己肯定感が養われないですとか、自分が本当に必要な人間だというふうなことを持たないままに育ってきたということがあるということがあります。そういった面で行きましても、家庭以外の場で自分は役に立つ人間だといったふうに子どもたちが思えるような働きかけというのが非常に重要じゃないかというふうに思っております。

とはいえ、昨年度も話題になりましたけど、先生方の負担といった中で、どうそれを折り合いをつけながら、そういったコミュニケーションをいろんな周りから働きかけるかということが重要かと思えます。また、そういった面では、昨年は学生ボランティアの活用というお話があったかと思えます。学生ボランティアにおきましては、当然部活や運動もありますし、勉強もありますし、さまざまな面で子どもたちを支援できるのではないかというふうに考えております。

○市長 ありがとうございます。

今の話で、教育委員会ないしは中学校長会の藤井さんとかコメントすることがあれば。

○事務局(後河審議監) 生涯学習担当の審議監でございます。

学生ボランティアということで、今私ども生涯学習課を中心にいろいろとモデル事業もさせていただいております。現場も見させていただいたりしておりますけれども、学生という子どもたちに近い年齢層の方々がこういう場に入ってきていただいて、いろいろ

と活動していただくという部分については、やはり先生方とか我々のような立場の者が接するのとは、子どもの表情も違えば様子も変わってくるというふうに関心現場を見て思いますし、今お話がありましたように、そういった方々のお力をかりて、学生の皆さんの力をかりて、児童・生徒との距離感を縮めながら、これを発揮させていくかというところは、我々の任務だろうというふうと考えております。

○市長 ありがとうございます。今の後段のほうはよくわかりました。前段のほうで、いかにもやんちゃな子が暴力行為等を起こすんじゃないかと、もう見た目も普通な、学力的にも問題ないような子が暴力行為を起こしたりしてるという事実というのは、岡山の中学校でも見られますか。

○藤井中学校長会長 岡山では比較的予備軍といいますか、大体起こしそうな子はわかりますけれども、ただ全国的には突然切れたりするような、そういうちょっと非社会的な学生や生徒が突然切れて刃物というようなこともあったりしますが、岡山は大体目星がつくといいですか。

マイクを持ったついでであれなんですけど、先ほどベネッセさんが言われた生徒の力をもっと使ったらというような話をして、私も以前市内のある中学校におったんですけど、そこでトイレトペーパーがいつも便器の中へ投げ込まれて使えない。使いたくても使えない状況がずっとあって、それを生徒会で声かけをして、やんちゃな子はたくさんおって、うろうろしてるんですけど、トイレトペーパーがちゃんと普通どおり使えたというようなこともありますから、やはり生徒自身の力はとても大きいと思います。

○市長 実体験に基づく話ですね。

これで一応ひととおりですが、何か今の議論をお聞きになってお話、はい、じゃあお願いします。

○藤原委員 生徒の力というのは、本当にそのとおりだと思います。岡山市では、今はどうかわからないんですが、PTAが主催で中学校の全部の生徒会の代表の子が集まって、一堂に会して今ある問題点を議論したり、シンポジウム形式でしたりという行事を持っていたと思います。今もあるのかもしれないです。それを多分子どもたちが学校へ持ち帰って、自分たちの学校で何かする。例えば、いじめ撲滅であるとか、そういう形で動いてたんですが、それをもう少し教育委員会であるとか市が後押しをすると。その成果を称揚するとともに、それから次につながるような対応をもう少し大きく取り組むことになれば、全市に行くのじゃないかなという気がして今聞かせてもらいました。本

当に生徒の自主性というのは、自分たち自らが変わるということにならないと、こういう問題は解決できないと思います。

それからもう一つ、さっき藤井会長さん言われたんですが、私自身はこれからの新型の難しさは何件か経験しました。外目には勉強もできる、家庭もしっかりしている、高学歴の中で何不自由なくしてる、それでもある日突然というのが何件かありました。だから、ぼろぼろはあるんじゃないかと思います。そのあたりは、さっき学年がチームになる、これ、物すごく大事なんですよね。でも、小学校の例、今言われましたけども、小学校であるとか小規模校であるとかということになると、やはり学年がチームということだけでは解決しないことがあるし、学年の質が高まっていれば、それが中学校で3つ揃えばいいんだけども、現実的になかなか難しいところもある。

何かどこかが統括するというのか、目標は同じだという、目指すところは同じで手法はそれぞれ学年団が特性があったり、いろんな工夫をする。だけど、向かうところは子どもたちのこれを育てるんだというところがはっきりしないと、教職員、教員以外職員プラス、さっき服部課長さん言われたような各種の専門家の人たちを束ねていって、いい方向に行くのは、なかなか難しい実態もあるのかなというのをちょっと思いました。

○市長 今の藤原さんのご意見に対してどうでしょうか。何かございますか。

○事務局(服部教育支援担当課長) 岡山市でもスマホに絡めて、平成26年度から平成27年度にかけて各全中学校区全ての学校において、それぞれの学校での取り組みをまとめてもらいました。提案書という形で各家庭に約束事を決めてくださいという取り組みをしたところです。それを受けて、今年度から「しゃべりんぴっく」といって、岡山市の全ての中学校の生徒会が岡山市役所に集まりまして、それぞれの生徒会の取り組みを紹介し合うといったような取り組みもスタートしたところです。

それから、先ほど藤原委員が言われましたPTA主催のこれは「しゃべり場」というんですけれども、これにはPTAの方々とともに生徒会も参加をしまして、親子でというか、世代間を超えて、さまざまな課題について討議をし合うといったような取り組みも継続させていただいています。

それからもう一点、先ほどの家庭の背景が見えにくいという問題なんですけれども、以前は個人調査票の中に保護者の職業ですとか家庭の状況なんかも書いてあったんですけど、今はもうそういうことも書かないこともあります。そういう中で、なかなか家庭

の状況が学校からみて見えにくいという状況から、ある日突然といったようなことが起きる可能性は増えてきているように思います。ただ、藤井先生が言われたように目星がつくというのは、そういうところまで入り込んで、ふだんからかかわっているからこそ目星がつくケースが岡山ではまだまだあるんだということは、岡山の自負として持っておきたいなというふうに思います。

私も1件だけ経験を言わせていただくと、すごく家庭はしっかりしている家庭だったんですけども、ある日突然子どもが荒れ始めました。その背景を考えていくと夫婦仲がよくなってきた。そのさらに背景を考えていくと介護の問題があった。そういうところから子どもがストレスをためて、子どもがある日突然髪の毛を染めて学校にやってきましたといったような経験がございます。そういった見えにくい背景をどういうふうに入力していくかというのが、これからの課題ではないかなと考えています。

○市長 1点だけ、私が服部さんに伺いたいんですけど、先生は生徒の保護者の職業というのは知っちゃいカンのですか。

○事務局(服部教育支援担当課長) 知ってはいけないとは思いますが、今学校が集めている調査票の中には書く欄はもうありません。

○市長 書く欄をやめた理由というのは何なんですか。

○事務局(服部教育支援担当課長) やはり個人の情報にかかわることなので、保護者が任意で学校のほうに、うちはこういう仕事をしていますということをお伝えいただくのは結構なんですけれども、学校のほうから尋ねるといことはもう既にやめています。

○市長 個人情報というのは、そういうところまでオープンの情報ではないと思うんですが、西島さん、全国的な動きはどんなんですか。

○ベネッセ(西島) 全国的に調査票からその項目が動いているかどうかというのは私も認識をしておりますが、個人情報の扱いとしては、住所であろうが職業であろうが、どちらにしても個人情報でありますので、それをしっかり管理するということが担保できていけば、聞くことは法的には全く問題ないと思います。

○市長 私もそう思うんですけどね。家庭の環境が全くわからずに、例えばお兄さん、お姉さんがいるのかとか、兄弟がいるのかとか、わからずに先生って指導はどうなんですかね、教育長。

○菅野教育長 今、個人調査書というのがあって年度初めに出してもらいますが、住所それから兄弟関係、電話番号などは当然ございます。それから、保護者のお名前、これも

ございますが、私がすみません、はっきり記憶しておるわけじゃないんですけども、指導課にいた平成シングルのおきですね。10年より前ぐらいから、恐らく特定の保護者だったと思うんですが、何でここへ自分の職業を書かんといけんのんだというようなクレームが来て、いろいろ検討を重ねて、もう調査書からはその項はなくしたと、職業を書く項はなくしたというふうに私は理解してますが、そういう感じですよ。

○事務局(服部教育支援担当課長) はい、そうです。

○菅野教育長 奥津先生、すみません。

○奥津委員 恐らく保護者の職業を学校に言わなきゃいけない義務があるかと言われると、それはやはりないんだろうとは思いますが、だから、それが恐らくそういった調査書なんかを見ると、これは義務として書けと言われてるのかというふうに感じた保護者がこんな書かなくていいんじゃないかみたいな話から、じゃあもうやめちゃえみたいな話になったのかなと想像はするんですけども、恐らくは指導する上で非常に参考になることで、ある程度必要性として感じることはあるんじゃないかなと。できれば把握をしないといたほうが言い事柄だろうとは思いますが、なかなかそういったことで全て保護者がすんなり出してくれるのか。出すべきだというふうに理解を得て、理解をした上で、そういう開示するというところまで理解がきちりできてるかということ、恐らくなかなか今の世の中、そういう状況ではないのかなというふうには感じます。

○市長 私も書かない事由というのはあるんじゃないかとは思いますが、それを先生方が把握しちゃいかん理由もまたないんじゃないかなというふうに思いますけどね。ここで結論を出すのは早計だとは思いますが、書きたくないという人が1人いると、1人じゃなくても10人でもいいんですけど、いるから全部そこは書くのをやめるというのが果たしていいのかどうか。これはこれから子どもたちを指導するに当たって、先生としてどういう状況を把握しておくのがいいのかという問題は私はあると思います。これは教育委員会のほうで少し議論をしていただきたいというふうに思います。

○菅野教育長 わかりました。

○藤原委員 今回の件つながりなんですけど、例えば緊急連絡網をつくらうとしても、多分電話番号の開示ができないというところで、自分と次の人ぐらいはわかってると。そういう状況もあって、何が言いたいかということ、要は学校の先生が今とても多忙感とか、いろんなことで困っていることの中に、多分子どもの実態を把握するのに情報収集に時間がかかるというのが一つあるんじゃないかと思えます。

さっきの私が高学歴と言った親御さんと話をしている中で、親以上の学歴になってほしいと、そういう望みが昔からあるんだろうと思いますが、そういうときに、したくない勉強をしてるとかというストレスがひょっとしたら問題行動に駆り立てるかもしれない。それは少ない理由だとは思いますが。だから、そういうことがわかるまでにも時間がかかるんですね。親御さんと話をしたり、子どもたちと話をしたり、それからさっきの介護のことも出てきたり、何がその子どもをそういうふうに向かわせているのかわかるまでの時間が、先生たちの多忙感にもつながっているんじゃないかと思います。先生たちは一生懸命わかろうとして努力するから未然に傾向をキャッチできるというのは、これはすごいことだと思いますが、その背景にある時間は今のような社会状況の中で、見えないものを見ようとする、わからないといけないことがあるんじゃないかなというのは思います。

○市長 ありがとうございます。

そのほかにどうでしょうか。何かございませんか。

はい、じゃあこの問題はこのあたりで整理をしていきたいと思います。

それから次に、大綱ということですが、今日は本当に骨子中の骨子ということで骨子案を整理をしていただいております。資料の2について、事務局から説明をお願いします。

○事務局 はい。それでは、資料2、大綱の骨子案について事務局からご説明をいたします。

まず、タイトルですが、「岡山市教育大綱」とし、全体の構成としては、まず「はじめに」と題した前文を置き、本文として施策の目標、施策の方針、施策の実現に向けての環境整備、この3つの項目を置くことを考えております。

次に、各項目の主な内容についてご説明をいたします。

前文の「はじめに」では、まず核家族化や共働き世代の増加、情報化、グローバル化といった社会環境の変化や新学習指導要領等、国の動向など、教育を取り巻く背景から派生する課題などについてと、また大綱策定の法的な根拠であったり、また大綱が対象とする期間を平成29年度から平成32年度の4年間とすることなどを内容としたいと考えております。

本文のうち、施策の目標では、岡山市として教育の振興や人材育成に取り組むための施策の目標を定めます。この大綱では、これを「明日の世界に雄飛する『人を樹え

る』』としたいと考えております。これはこれまでの総合教育会議の中でいただいておりますキーワード、例えば「世界に目を向ける」ですとか、「たくましく生きる力」、また「子どもたちが大きくなって堂々と羽ばたいて活躍する、そういう土台をつくるのが教育」といった、たくさんのキーワードを踏まえたものでございます。

また、この「人を樹える」については、2枚目に添付しております別紙にございますように、市長室にあります郷土の先人・犬養木堂先生の書になる中国春秋時代の管子の言葉にちなんだものでございます。教育は郷土発展の礎を築く重要な取り組みであり、知・徳・体の調和のとれた岡山っ子の育成に力を注いでいくという大綱に掲げる大きな目標にふさわしいものではないかと思っております。

次の施策の方針ですが、前回と今回の会議でご意見をいただきました2つの重点項目、学力の向上と暴力行為、いじめ、不登校の防止及び解決に向けて、現状と課題、取り組みの方向とともに注目していく指標を掲げる内容としたいと考えております。

次の施策の実現に向けての環境整備ですが、ただいま2つの重点項目に関することをはじめ、これから取り組んでいく施策を実現していくために、さらに環境を整えていく事柄として、これまでの議論の中から学校の組織力の向上や教員の負担軽減、地域協働学校の取り組みの充実や社会全体で子どもを育む意識の醸成などについて取り上げようと考えております。

以上でございます。

○市長 はい、ありがとうございました。

では、この骨子案についてご意見をいただければと思います。

じゃあ、奥津さんから、またよろしくお願いします。

○奥津委員 施策の目標「人を樹える」という、前回の教育委員会の会議でそれを初めて見まして、これは市長室に掲げられてるんですかね。それで、「明日の世界に雄飛する」という形で設定した標語というか、目標のあり方としては賛成できるものかなというふうに思ってます。施策の方針として、もちろんこれまで議論してきた一番の課題の学力と今日議論した問題行動等ということの2つの柱にすえるという、このずっとやってきた総合教育会議の中でのものをまとめるような形で流れているのかなというふうには感じているところです。

○市長 はい、ありがとうございました。

では、石井委員、お願いいたします。

○石井委員 はい。今、奥津さんがおっしゃったとおりで、私も同じような意見を持っております。犬養木堂先生の言葉から今回目標、表題を掲げるというのが、岡山に関係する、ゆかりもありますし、なじみがそんなに深くあるわけではない方もあるかもしれませんが、すごく意味のある言葉だというふうに理解をしております。施策の方針については、同じようにこれまで議論した大事な問題というか、課題について取り組むということが明確であって、わかりやすいかなというふうに感じております。この期間、4年間というのは、これまでの議論の中で何年がいいのかとかというのもあったと思いますけれども、ほかの施策、計画等の整合性も含めてとられていることが確認できればいいかなというふうに感じております。

○市長 4年間にした理由は、事務局のほうでお話いただけますか。

○事務局 市の大きい方針を定めております総合計画の中の中期計画のほうが平成32年度までになっておりますので、それと整合をとったものでございます。

○市長 よろしいですか。

○石井委員 はい、わかりました。

○市長 じゃあ、藤原さん、お願いいたします。

○藤原委員 このシートを拝見して、がっちりした教育大綱ができるなという感じがしました。オーソドックスといえばオーソドックスなんですが。感想として、目標のスローガンは多分聞く人が、あ、これ、何とって見てくれるから、それで第一歩成功かなと思います。ただ、雄飛するというのが、市民の目線ですぐにわかるのかな。羽ばたくよりも強いんですね。雄々しく羽ばたくということで物すごくインパクトがある一方で、説明が要るのかなと。言葉として、わからないことはないんですけども。「人を樹える」については、さっき石井委員さんも言われたけど、教育委員会も郷土のいろんな人を顕彰していこうという動きもあるので、ちょうどいいかなという感じがします。教育は百年の大計というのをもう一回皆さんにわかってもらう上でもいいかなと思います。

その次の施策の方針のところは、非常にスローガンは羽ばたいていって大きいんですね。でも、足元を書いてるんですね。そのあたりのつなぐところを子どもたちの夢の実現か、世界に羽ばたいていくとか、何か1つワンクッションが要るのかな。項立てが要るのかな。岡山市の今の市民の一番若い市民が今後活躍するとしたら、すごくバラ色だけではないんだけど、やはり未来を託すということで、少し高邁なというのはち

よつと言い方が変なんですけども、高いところの一つ要るのかなという感じがしました。

それからもう一つだけ、施策の実現に向けての環境整備のところ、地域協働学校の仕組みがあるんですが、縦軸がちょっと感じられないかなと。だから、就学前から小学校、中学校、それを通じて地域の人が守ってくれる、育ててくれる、育てていくんだ、市としてはというふうな縦軸のイメージがどこかにあればいいかなと思いました。

○市長 「人を樹える」というのはいいとして、「明日の世界に雄飛する」というのが、ちょっと飛び越え過ぎてるということですか。

○藤原委員 そんなことはないです。

○市長 夢に向かって羽ばたくとか、そんなイメージですかね。

○藤原委員 イメージとしてはね。ただ、文言として変えるとか変えないとかじゃなくて、すぐにわかってもらえるかなという。音だけで「ゆうひ」、「ゆうひ」といったら、余りなじんでないかなという、私自身はですけどね。

○市長 それはおっしゃるとおりなのかもしれませんが、これはまだ決めてるわけでもないですし、しかも当然ながら今の意見を参考にして、また議論させていただければと思います。あとは縦軸の話は何か事務局からありますか。

○事務局(岡林指導課長) 指導課長でございます。

縦軸のお話いただきまして、岡山市はこれまで岡山型一貫教育というふうな言葉で柱の一つとしてやってきたものをイメージしていただいたのかなというふうに思っております。これについては、就学前から小学校、中学校の連携をしっかりと踏まえた取り組みを今後も進めていきたいというふうに考えております。

○市長 わかりました。じゃあ、そういう視点からの記述をちょっと考えていただいて。

じゃあ、藤井さん、お願いできますか。

○藤井中学校長会長 下から5行目、「一丸となって」が今日言われたチームが出てくればいいのかと思いました。あと、「人を樹える」という、もうすばらしい一つの大きな構えができてるので、これは本当に感心いたしました。すばらしいと思います。

○市長 はい、ありがとうございました。

じゃあ、薄さん、お願いいたします。

○薄小学校長会長 20年後、30年後は今の子どもたちが間違いなく、この世の中の中心となって活躍してくれてると思いますので、そのときを見据えて、小学校長会、中学校長

会、幼稚園長会、いろいろありますけども、教育委員会も交えて、それこそチーム教育会という感じで取り組んでいきたいと思っております。

○市長 じゃあ、西島さん、お願いします。

○ベネッセ(西島) 失礼します。最後の環境整備のところなんですけれども、やはり先生頑張れ、先生頑張れというふうに読めてしまうんですが、教育委員会のリーダーシップといったときに、やはり教育委員会の組織の強化というのも本音では必要かなというふうに思います。それを市民の方にどう出すかというのは難しいところかとは思いますが、この10年ぐらい、市町村の教育委員会の指導主事の数がどんどん増えていきます。平成19年度まではどんどん減っていましたが、平成19年度に全国学力・学習状況調査が始まった途端に、反転してどんどん増えている状況です。平成19年度から平成27年度までの9年間の変化でいうと1.2倍になっています。

当然岡山市の場合は、政令市になってさまざまな業務が増えていますので、その分増えてきてるとは思うんですけども、全国的にはそういう状況ではない中でも指導主事を増やし、リーダーシップを高め、よりよい学校教育を追求しているという状況があるかと思っておりますので、教育センター、教育委員会、総合して考えながら指導主事の強化というところも現実には考えていただけたら、より教育委員会のリーダーシップの発揮の仕方というのが変わってくるかなというふうに思います。

○市長 はい、ありがとうございます。これもどういうふうにしていくか、また事務局と議論させていただきたいと思っております。

じゃあ、梅田さん。

○ベネッセ(梅田) はい。この「人を樹える」というスローガンが、ほかの政令市の大綱とか見ましても、こういう形は余りないものですので、かなり新鮮といいたいでしょうか、見られた方からするとアイキャッチなというか、すごい目に飛び込んでくるものだなというふうに感想を持ちました。

1点、先ほどの藤原先生もおっしゃられましたけれども、施策の中で学力向上と問題行動を減らすというのは、もう両輪だといいたいでしょうか。今回これを見たときに、2つがそれぞれ独立して見えないような何かつなぎといいたいでしょうか、これはもうこういうことをやるためにこの2つがあるんですみたいな持っていく方をすると、根っこは1つで、そういうふうな形に見えていくのではないかなというふうに思いました。

○市長 はい、ありがとうございます。では、教育長お願いします。

○菅野教育長 はい。もう本当に深い、また広がりのある、ご審議をたくさんいただいて、本当にありがとうございます。というのは、私が言うことじゃなくて、市長さんが言われることだと思っんですけども。こういう総合教育会議だけでなく、教育についてのいろんなことを話をするのを市長さんとたくさんやってきました。市長さんはブレインストーミングという形で言われるんですけども、しっかりやってきて、非常に教育委員会のことをしっかり把握してくださっていて、考え方もよく聞いてくださっています。

今日、藤原委員さんも、それから梅田さんもおっしゃってくださったんですが、施策の目標と、それから方針で学力と問題行動だけ出てくると、ちょっと整合性の部分ではどうかなと思いました。さっき梅田さん言ってくださったように、これを生のものがばんと出てくるんじゃないで、何か間に1つ入るといいますか、1と2が独立していないようにというふうにおさめてくだされば非常に私自身はすっきりしますし、これは市長さんにも初めてお会いしたときに話をしたんですが、私は温かい国際人の育成をしたいなというようなことを言った記憶があるんですけど、そういった温かい国際人の育成というようなものが中に入れば、そのためにも学力をしっかり上げていかんといけないし、問題行動も減らしていかんといけないということもなるのかなというように勝手に思ったりはしたんですけど。

そういったこと、いろいろ勉強にもなり、それから私自身も本当に今後を考えていく上で、本当に教育長になったばかりで、この課題があったので、もう面食らうことがとても多かったんですけども、非常に気持ち、考えの整理がつく3カ月間だったなということも思っています。これからいろんな意見で総務局のほうで大綱を練ってくださると思うんですけども、また我々もこれを受けて、しっかり教育について取り組んでいかないといけないなという思いを新たにいたしました。ありがとうございました。

○市長 ブレインストーミングをこの夏以降、本当に多くさせていただきました。そういう面では、学力向上に関して、前回の資料というのは私は教育委員会の思いというのが相当赤裸々に出てるんじゃないかなというように思います。それに引き続いて、この問題行動でも課題になるものを明確に示していただいているという面で、教育委員会そして総務局の努力だとしたいと思います。

しかしながら、この大綱については、これから議論していくことになるので、意見を願いたいなというように思います。

まず、私なりの感じを言わせていただきますと、やはり誰が中心となって、これからこういう施策をやっていくのかという、その責任主体というか、それを書いていかないといかんのじゃないかなというように思ってます。私はその主体というのは教育委員会しかないんじゃないかなと。だから、教育委員会のリーダーシップを持って、そして先生を中心として、地域を巻き込みながらやっていく。こういう構図を書いていく必要があるんじゃないかと。チーム学校とか学年チームとか、そういうのももちろん重要だと思いますが、例えばそれのときでも一体誰が中心になっていくのかというようなことというのが整理をしとかなきゃいけないんじゃないかなというのが、まず1つであります。

2つ目は、今教育長もおっしゃられたんですが、この施策の方針の1と2というのは、これは連動してる。だから、根っこは1つなんで、我々何を求めて、この1と2をやろうとしてるのか。そここのところを整理をしていく必要があるのではないかとというのが2つ目であります。

もう一つは、この取り組みの方向、今の段階ではこういう表現で、方向性、これは私は明確に出てると思いますが、これをできるだけ、大綱とはいえども、全部網羅する必要はないんですが、やはりブレイクダウンしていく。要するに具体的なものを書いていくということが必要なんではないかなというように思います。

そして、これ、私、今日まで全く考えてなかったんですけど、薄さんが言われてることから見て、小学校と中学校というのはちょっと違うこともあるんじゃないかなと。だから、小学校と中学校をちょっと整理をしてみるというのもあるのかなという感じが少ししました。これはもう思いつきであるわけでありましてけども。

それからあと、下から4行目の話でありますけど、今回ずっと議論になってる教員の負担軽減、これ、先ほど事務局からも話がありましたけれども、このあたりももう少し具体的なものにしとく必要があるんじゃないかというように思います。

そして最後が、これが最大の問題だと思うんですけど、目標設定をしますよね。これで学力と問題行動を目標設定をして、その目標に向かって動いていく。これが4年間、4年後がゴールになる。そのゴールになっていく、それぞれ毎年ずっと、毎年というか、毎日になるかもわからないですけど、その達成のためにいろんなことをやっていく。こういったことを、今こんな状況になってるんだということをやはり私は一定期間ごとに市民にお知らせをしなきゃいかんのじゃないかなと。

大きな市民の力で一緒になって、教育委員会はまだ十分じゃないじゃないか、よくやったなでもいいんですけどね、俺たちも一緒になってやろうというようなことを、そういう空気を醸成していくためにも、そういう一定期間ごとに市民にきちっと説明をして、そしてその状況を話をし、批判もいただく。そういったことをやっていく必要があるんじゃないかなというのが、これ、私がずっと思ってることなんですけども、こういうような思いをちょっと持っております。全てを事務局に話をしてるわけじゃなくて、今の小・中学校の話なんていうのは今の思いつきの世界でありますけど、それ以外は大体話はしてるんですけど、こういう今私の考えみたいなものに対して何かご意見があればお願いしたいと思います。

西島さん、何かないですか。

○ベネッセ(西島) 何を求めて1と2の施策をやるのかというところは、恐らくこのペーパーの中でいうと上のほうにある国の動向や環境変化といったところとかかわってくると思いますので、そこをきちんと掘り下げて、ちょっとテクニカルな話になりますが、目標が先に掲げられており、それに対して社会や国が動いている、だから岡山としてはこういう子どもを育てたい、なのでこのことをやっていくんだというふうなつくりになれば、スムーズにつくっていけるかなというふうに思いました。

それから、最後のほうで言われました目標設定に向けての進捗の公開というあたりですが、これは恐らくこの最後の項目として大綱の運用というふうな項を定めて、つくって、その後放置せずに、この後こうやっていきますというところまでを含めて大綱にしていくということがあればいいかなというふうに思っております。

○市長 何となく肯定的な意見として受けとめました。

○ベネッセ(西島) はい、そうです。これはもちろんですね。

○市長 校長会の皆さん方はどうでしょうか。

○藤井中学校長会長 十分よく理解できます。ですから、市民の人に伝えるということはとても大切だろうと思いますし、また私たちもそれに向けて頑張らなければいけないということも問題意識を抱えて十分ありますから、もう言われるとおりのことはよく理解できます。

○薄小学校長会長 私も十分理解できますし、よりこれを具体的に、多くのことはできないんですが、重点的に、また具体的に取り組んでいくことを考えてやっていきたいと思っております。

○市長 委員の皆さん、どうでしょうか。

○奥津委員 目標設定とか市民の皆さんに知らせる、重要なことだとは思いますが、恐らくは、ただ本質的な部分としては、なかなか教育の一番大事なところというのは、目に見えない部分、木でいうと根、人を樹えるわけですけど、大きな木にするには、やはりまず根を張ってもらって、しっかり根を張った上で、ぐっと成長するところの根を張る部分だろうと思うんですね。その部分は、なかなか報告とか目標といっても見えない部分もかなりあるのかなという。それをある程度前提としながら、どれだけ葉っぱ出ましたよとか枝が張りましたよとかというような形の報告とか目標設定にはなっていくという部分は、前提にするべきなのかなというふうには感じております。

○市長 教育の本質ですよね。本質をちゃんと理解して説明しなきゃいかんし、市民にもそういうふうを受けとめられるような、そういう説明をしていかなきゃいかんというのは、おっしゃるとおりなんでしょうね。ありがとうございました。

ほかにありますか。

○石井委員 市民にお知らせするということでは、よりマスコミ等も含めて、実際に一般の市民の方が表面的に理解されてる部分でとどまっている部分も深めて、何か本当の実情というのをより知ってもらう。そして、参加していただけるような機会を増やす。市長もおっしゃられたとおり、批判をいただくときはいただくという形で、よりかかわりが増やせる。プレッシャーにもなるとは思いますが、そういう機会は全体にとっていいことかなというふうに感じております。

あともう一つ、責任主体は教育委員会ということでお話がありましたけども、一方で先ほど子どもたちの自主性とか学年の先生のチームとか、それぞれの自主性についても話がありましたので、当然責任の主体は教育委員会でリーダーシップを発揮するんですけども、それがあたかも、教育長、先ほどおっしゃられたとおり、それぞれが主体的にやってるような仕掛けづくりをして指示命令ではないような形をとったほうが何かうまくいくんじゃないかなというふうな気がしました。

○市長 おっしゃるように全てが教育委員会でやるわけじゃないですからね。そこは書きぶりの問題だとか、いろんなことがあるんだろうとは思いますが。後で教育長のほうのまた見解をいただきたいと思いますが、どうぞ。

○藤原委員 目標設定するからには、一定期間ごとの市民へのお知らせは、これは当然必

要かなと思います。ただ、そのやりようで、目標の設定の仕方であるとか、やりようで、例えば今岡山市のほうでは振興計画もありますよね。それから、プランもあったり、教育委員会の事務事業評価のシステムもあります。だから、そういうものが屋上屋を重ねるような形になるのか、じゃなくて大綱は大綱で、また違う指標で市民に知らせたり、意見をもらうことができるのか。そこは工夫が要るんじゃないかなと思います。ただ、PDCAのサイクルに乗るということは、これ、当然要るでしょうし、ただそうなったときにモデルチェンジというか、スモールチェンジをするのか、もうそれは施策レベルでしていくのかというのはあると思います。

○菅野教育長 今のお話の続きになるかどうかかわからないんですが、岡山市の教育委員会には、教育委員会にはどうか、岡山市には岡山っ子育成条例という条例があり、それからさっき藤原委員さんがおっしゃってくださったような、いろんな基本方針なり、前期中期計画とか、それから市長が掲げる、この大綱というのもあり、いろんなものの整合性をとるというのは、すごい大変な作業になってくるんだろうなと。その中で、この大綱という、もう本当に柱になる、幹になるものが決まりつつあるわけですけども、要はさっき藤原委員が言われたように、つまりどの指標はどこで使うのかというような、市民の方が見て混同しないようなものにしていかないといけないし、本当に施策にいろいろ反映できるものをしっかり考えていかないといけないなということを改めて思いました。まだまだこれもいろいろ詰めていかないといけない部分かなというふうに思っています。

○市長 ありがとうございます。

今までの各委員の意見を踏まえて、またご意見などございましたらお願いいたします。

はい、どうぞ。

○藤井中学校長会長 すみません。最後に1つだけ。この大綱は柱とも言われたんで、やはりこんな子どもにしたいとか、教員がいつも心の中に根づいて持っている目標、こんな子どもに岡山の子どもはしたいというようなものが書き込まれとったら、一つ光るものができるんかなという、今日いろいろ話を聞いて思いました。

○市長 藤井さんのこんな子どもにしたいというイメージが、ここで披瀝できるものがあれば、おっしゃっていただけますか。

○藤井中学校長会長 それを言われるとあれですが、岡山の子どもたちというのは余りグ

ローバルというか、外に出ていくような気持ちもないのかなど。恐らく他府県に就職もしたりすると思うんですけど、結構帰ってきて、ここでこの地域に根づいて生活している子どもたちが多いのかなど。ですから、やはり郷土を愛するとか、そういうふうなところが盛り込まれたら、岡山を盛り立てていくというか、どういう言葉か具体的には申せませんが、そのようなところで岡山を守り立てて持ち上げていこうというような、そういう精神のある子どもが一人でも多く出て、外へ出ても、その気持ちがあったら、岡山で育ったよさを外でも発揮してくれるのかなというふうな気がしています。

○市長 今の藤井さんの言葉に対して、何かございますでしょうか。

○ベネッセ(西島) 私のこんな子どもにしたいというところでいうと、これからは本当に変化の時代になっていきますので、変化に強い子どもというほうが、子どもが明日の世界に雄飛するという意味では近いかなど。藤井先生がおっしゃったのとちょっと反対のことを言ってしまうておりますが、というような気がしますが、変化に強いということと、岡山に根差すということは、どう一緒にできるのかなというのを何かうまく考えていけたらいいかなというふうに思いました。

○市長 その変化とは何をイメージしてるんですか。

○ベネッセ(西島) いや、もう社会の変化とか職業の変化といえますか、今ある職業は何割はなくなるとかという話もあつたりしますし、今子どもたちが学んでいることが通用しない時代が20年後、30年後には来るだろうと。人工知能のこともそうですし、グローバル化もそうですし、そういったときにでも、たくましく生きてるし、郷土を愛しながら生きてるような子どものイメージです。

○市長 さまざまな流動化に対応できると、そういう意味ですね。

○ベネッセ(西島) はい。

○市長 はい、わかりました。

確かに私も藤井さんの提案というのは非常におもしろいと思うんですけど、だんだんとやっていくと総花チックになっちゃうんですよね。だから、そこを抑えていかなきゃいかん面もあると思うんですけど、何かございましたら。

○藤井中学校長会長 ちょっと言われたんですけど、どんな変化が起きても自分の軸というものを持っている生徒にしたいという、そういう思いがあります。

○市長 ちなみに私は出身が操山高校なんですけど、「和して流れず」という言葉はありましたけど、そんなイメージに近いかもしれませんね。

○石井委員 私も岡山に帰ってきて生活して仕事してるんですけど、とはいえ、やはりグローバル化とか変化って、すごく強く岡山にいても感じてます。今まで以上に多分仕事してたら、例えば為替がばんばん変わっていくと、もうそれがすごいスピードで変わっていきますし、いろんな変化の早さって非常に強く感じてるので、その中で変化に強いという人が会社として欲しいなというふうにも強く思っているところでございます。すみません。失礼しました。

○市長 藤井さんの提案、事務局でちょっともんでもらって、どういう案になるか、最終的にやめるかもしれませんけれど、やらせていただきたいと思います。

じゃあ、その他はよろしいですか。

はい、ではこれまでの議論を事務局で整理をして、大綱をつくる作業を進めさせていただきたいというように思います。

事務局、次のこの会は大綱の案が出るという理解でよろしいですね。

○事務局 形になったものがお示ししようと考えております。

○市長 いつ頃、次の会をやるというイメージなんでしょうか。

○事務局 まだ詳細は決まっておりませんが、できれば1月の末のあたりでと考えております。

○市長 じゃあ、1月末に議論させていただくということで、ただ今日もいろんな意見が出ましたから、その間に個別に少し意見を聞かせていただくかもしれませんので、またよろしく願いいたします。

最後、事務局にバトンタッチさせていただきます。

○司会 ありがとうございました。次回の会議は、また改めて通知をさせていただきます。

以上で平成28年度第4回岡山市総合教育会議を閉会いたします。

お疲れさまでした。ありがとうございました。